

は し が き

東南アジアの現在は、医学的に見て多くの問題にみちみちている。文明諸国の医学から見れば、すでにかかなりの程度に究明されてしまった疾病ないし医学的諸問題、たとえば結核、癩、性病、寄生虫病、ウイルス病、あるいは精神医学的、衛生・公衆衛生学的、栄養学的諸問題等が東南アジアではほとんど未開発のままにとり残されているといつてよいであろう。見方によれば、東南アジアは研究開発の望まれる医学の沃野である。一方、高度の医学をもつ諸国は、東南アジアの医学の現況に目をむけて研究の手をさしのべ、疾病苦の解放に力を致すべきものと考えられる。

今回、京都大学東南アジア研究センターが厚生省、海外技術協力事業団と共催で東南アジア医学シンポジウムを開催するに至ったのはまことに時機に適したものというべきである。東南アジアの医学に強い関心をよせていた者は、今回のようなシンポジウムを渴望していた。今それが実現したのである。わが国における最初のシンポジウムである。

第1回シンポジウムとして私達は、まず日本人だけで東南アジアの医学の現状を把握するということに焦点をおいた。そして現地経験者によるシンポジウムとした。4つのシンポジウム（寄生虫、ウイルス性疾患、性病、結核）の外に、次のような6つの招待講演が行なわれた。

1. 曾田長宗（国立公衆衛生院長）：東南アジアにおける衛生事情
2. 若松栄一（厚生省医務局長）：海外医療協力の実情
3. 岡田誠太郎（京大助教授）：タイ国の癩、特に小児癩の現地調査
4. 美濃口玄（京大教授）：東南アジアにおけるむし歯の問題
5. 白木博次（東大教授）：タイ国における2、3の神経疾患
6. 上野一也（国立姫路病院眼科医長）：タイ国における眼科疾患

そしてシンポジウムの最後は白羽弥右衛門教授（大阪市立大学）司会による実り多い総合討議であった。

1967年2月

東南アジア医学シンポジウム組織委員会委員長

京都大学ウイルス研究所教授 東 昇